

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：風景構成法における彩色についての研究
Author(s)	古川, 裕之; 皆藤, 章; 松井, 華子; 千秋, 佳世
Citation	研究開発コロキウム：平成21年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2010): 32-33
Issue Date	2010-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143157
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

風景構成法における彩色についての研究

A Study on Coloring Process in Landscape Montage Technique

研究代表者：古川 裕之 (D2)

指導教員：皆藤 章

研究分担者：松井 華子 (D3) 千秋 佳世 (D3)

〔研究目的〕

中井久夫によって創案された風景構成法は心理臨床の一技法として広く用いられている。風景構成法はペンを用いて教示されたアイテムと描き足したいものを自由に加える構成過程（素描）と、クレパスなどを用いて自由に色を付ける彩色過程から成る。これまでの風景構成法についての研究は構成過程に重きが置かれたものであった。彩色過程についての研究は、疾病特性との関連で述べられる程度に留まり、彩色過程が持つ独自の意味の検討は十分ではなかったと言える。そこで本研究では、昨年度と同じく風景構成法における彩色過程が持つ意味を探ることを目的とした。特に、今年度は彩色特徴が描き手と見守り手にとってどのような意味を持つのかという点についての検討を中心に行うこととした。

〔研究経過〕

昨年度の活動を通して、描画データベースを基にしたディスカッションにより風景構成法における彩色特徴として複数の指標を抽出したが、今年度はその指標がどのような意味を持つのかについての検討を行った。その際には、風景構成法の彩色過程ではどのようなことが起こっているのか、またそれが描き手・見守り手双方にとってどのような意味を持つのかを念頭に置きつつ検討を行った。抽出した指標は、データベースを基に作成したものであるため、指標のみを検討対象とするのではなく、昨年度同様に描画データベースを繰り返し参照しながら、時にそれらの作品の模写などを行いながら作業を行っていった。これらの研究成果は2009年9月に東京で行われた日本心理臨床学会において「風景構成法における彩色についての研究」として口頭発表を行った。

また、本研究が心理臨床における描画法の研究であることを考える時、データベース内の臨床素材について検討を行うだけでなく、描画を用いた事例そのものについて検

討し、その視角から改めて彩色について考えることも必要だと考えられる。そこで、ユング派の分析家で描画療法について造詣の深い Paul Brutsche (パウル・ブルツェ) 先生をお招きして、研究分担者の松井が事例についての発表を行い、臨床事例とその描画についての理解を深めていった。

学会発表での意見やカンファレンスでのコメントなどを受けて、再度データベースを検討する作業を行い、彩色過程を研究する上での今後の課題などを確認した。

【研究成果】

昨年度抽出した指標の1つである、重色がどのような働きを持つのかを検討した結果、「立体感」、「質感」、「分解」、「効果線」などをその働きとして見出した。これらのことから、重色の働きの背後には「光や動き」を指向するところの働きと、「微細な差異・ニュアンス」を表現しようとするところの働きがあると考えられた。これらは直接描くことのできないものであるが、なんとかしてそれを表現しようと何度もそこに立ち返るにより、重色という表現に結び付くものと考えられる。何度も立ち返るという動きは無限の可能性を秘めたものであり、これは描き手にとっては楽しみとして体験されるかもしれないが、苦しいものとなったり、破壊的な作用をもたらす可能性もある。しかし、いずれにせよ重色を行うということは、良くも悪くも描き手にとってそこまでせざるを得ない何かがあるということだと考えられ、そういったプロセスにこそ描き手らしさが表れるとも考えられる。また、見守り手にとっても重色表現が表れることは、ここを動かされるポイントともなる。重色という彩色表現の特徴を1つの例として見てきたが、以上のことから、風景構成法における彩色過程は、これまで述べられてきたような作品全体の構成に寄与する働きを持つだけでなく、重色表現のように無限の可能性に開かれる「豊かさ」を含んだものとも言える。また、重色を含めた指標の再検討からは、教示されたアイテムを描き込んでいく構成過程は「ある/ない」の次元で分節化を行っていく作業であるが、彩色過程はどの領域に塗るか、さらにそこに色を重ねるか、余白をどこまで塗って、空白を残すかなど、構成過程における「ある/ない」の次元よりも多くの可能性に開かれたプロセスであり、自由度の高い作業をどこまでやるのかという難しさが描き手の中では喚起されるのではないかと考えられる。

講師招聘カンファレンスでは、彩色を含めた様々な角度から描画について検討していくことで、描画とその描き手の持つ豊かさや、面接経過や治療関係と描画との関係などについての理解が深まったと言える。

以上のように、かつての知の集積である描画データベースを用いて、これまで扱われることの少なかった風景構成法における彩色過程の検討をこの2年間で行ってきた。その際に、いかに我々の臨床的な感覚に沿った風景構成法の知見を見出していくことが可能かということを中心に意識して研究テーマに取り組んできたことは意義があったと考えられる。